

野鳥たより

—北海道—

第 4 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和45年11月発行
5月・8月・11月・2月 年4回発行

減少する渡り鳥

マガン・ヒシクイを保護鳥に

宮城県では、狩猟鳥となつてゐるマガン・ヒシクイを五年間にわたつて狩猟鳥から除外することを決めた。しかもこの措置は、野鳥保護団体からの要請ではなく、狩猟者みずからの意志によつて決定されたことである。また狩猟しないことばかりではなく、餌の不足する時期には、シイナ、コムギなどの給餌も行ない、積極的な保護を行なうことにしている。

ガン類に限らず、渡り鳥の減少は著るしい。ガンは繁殖地のシベリアでも目立って減つており、とくに日本を経路とするものの減少率が高いという。本道でも、かつては全道至るところで見られ、札幌近郊の茨戸や、オサツ沼はガンの名所とされていたが、今はほとんどその姿がなく、十勝地方の湧洞沼、道東地方の風蓮湖にわずかにその面影をとどめる。

今回の宮城県の措置は、五年間の捕獲禁止ではあるが、実際にガンの渡来地が失われつつある現在、将来にわたつて狩猟鳥として復活される見通しは暗い。ガン類の保護鳥への腕皮を、全国によびかけたデモストレーションとして受けとめることが至当のようだ。

現在、ガン類の狩猟県は、全国で数県に過ぎず、本道と宮城県の去就が、全国の動向を左右するとまでいわれている。私たちの野鳥保護への熱意を示すためにも、おくれぼせではあるがガン類を狩猟鳥から除外することについて、声を大きくして叫ぶ時期であろう。（豊頃町湧洞沼のヒシクイ一四〇・九・二三
—写真・野村梧郎）





自然を返せ!

生きものとしての主張

札

幌では郊外に往んでいると、冬の毎日は、すつぱりとスモックに覆われた都心部へ通うことがおつくである。たまに上京する東京都内では、いつも濁った鉛色の空である。

最近、東京で「自然を返せ!生きもの連合」のデモ行進があった。産業開発を優先した自然破壊と、たれ流しの公害に、被害者である生物総ぐるみの抗議の行動なのである。デモに加わった人の数は少なくとも、その背後には数千億、数兆の生きもの怨嗟(えんさ)の声がある。

最近、公害問題の発生から、自然保護対策が積極的に叫ばれている。しかし公害の主力は、利潤追求を優先した企業の責任に転嫁すべきものであり、自然保護は、生物全体の調和の問題として、より高い人間のえい知に期待されるべきもので、これを混同して、問題の本質を見誤まってはならないのである。

私

たちの幼ない頃、夕焼けの空を鉤になり、竿になりして渡るガンの群れがあり、「先頭はお父さんガン、しんがりはお母さんガン」と教えられた。子供をいつくしむ献身的な父母の姿をそこに見たのである。それは、何物にもました実践教育であつた。いまの子供達に、見上げる美しい空はなく渡りのガンの姿もなくなつた。

本年1月に、ソ連国際野鳥調査研究局の依頼で全国一斉にガンの渡来数を調査したが、本道ではわずか20羽しか確認されていない。これは調査時点のゆえもあるが、昭和38年3,022羽、40年1,106羽、41年110羽という記録からみても、ガンの減少は著しい。ところでガンは狩猟鳥であるが、十数種のガン類のうち、狩猟鳥となつているのはマガン、ヒシクイの2種類だけである。ところが減りはじめたガンは、狩猟対象のものばかりでなく、すべてのガンであるところを見ると、狩猟の圧力ばかりでなく、ガンの休息する海浜地帯の汚染や、有力な湖沼の埋め立てなどが原因のように思われる。

最

近、下北半島の北限のサルが、農業による影響を受け、林野庁では薬剤散布を中止したと報じているが、あれはごく限られた数

の保護獣だから注視を浴びたわけで、一般の野生鳥獣が開発と公害に追いまくられていることは、言語に絶するものがある。

目の届く海はどこへ行つても汚ればなしである。幼少の頃、母に連れられて行つた海水浴で、水につかつた母の足が、目にしみるよに白く澄んでいたことを覚えている。そして、ゆらゆらと小魚の影が、まぶしいような銀砂に映える海だつた。ところが今は、水も、大気も、すべてが汚ればなしである。森は切られ、丘は崩され、混地は埋め立てられ、自然はどんどん埋没している。野鳥も住めない公害都市となつて、どう人間の生命を保つことができるというのだろうか。

野

鳥愛護会が、7月にウトナイ湖畔で探鳥会を行なつたとき、地元苫小牧市の有志の方々の好意で、亡びゆくアオサギの営巣地を見せていただいた。それは鬼気迫る情影であつた。

苫小牧開発港の後背地として、千古の湿源は見ても無残に埋め立てられ、赤土の肌をさらしているが、この中にアオサギの営巣地だけをわずかに食い止めた。しかしむき出された営巣地は、人間の目と、他の害敵の襲げきにもろい。おびえているアオサギは、人影を認めるとすぐに飛び立つ。それを狙つてカラスが、次々に卵を破壊するのである。本道でも、最も野生鳥獣の豊庫といわれたこの湿源も、すでに風前のともしびとなつている。

これは苫小牧に限つたことではない。十勝地方の大津原野も、釧路湿源も、風連湖畔も、サロベツ原野も、次々に狙上り上つている。開発は人間の英知であるが、自然の破壊を誘発する開発は英知とはいえないのである。

生

きものとして私たちが主張することは、何物にもまして、生命の尊さを救うために、清浄な空気と、澄んだ水と、保全された自然環境を必要としているということである。

GNP第2位といわれながら、現在の社会は、便利にこそなつたが、しあわせになつたという実感にはほど遠い。

愛鳥モデル校の歩み

岩見沢市立孫別小学校

1. はじめに

岩見沢市は札幌市から約40km東方にあり、農業中心の静かな町である。当校は岩見沢市内東方の丘陵地帯で、岩見沢高原とよばれる所にある。学校周囲は広大な国有林、民有林に囲まれ、四季折々の野の花が咲き、野鳥の声も多く自然環境にめぐまれている。

2. 活動をはじめた動機

岩見沢市は静かな田園都市であるが、札幌に近いということで、宅地化がどんどん進んでいる。当校が位置する日の出地区も同様に、住宅が増し自然の破壊が進んでいる。そこで学校では、児童に

- ① 野鳥に親しみ、自然を愛するふくよかな情操を養ない、よりよい人格を育てる。
- ② 野鳥の姿や生態を観察して、科学的なものの見方、とらえ方を育成する。
- ③ 都市の発展や農薬の乱用で絶滅しつつある野鳥を救い、愛鳥思想を子供達を通じて地域社会に働きかける
- ④ 学校公園を利用する市民に、巣箱かけ、給餌活動の実践を通じて、野鳥保護の方法を理解させる
等の観点から、学校教育全般に愛鳥活動を盛りこみ実践することにしたものである

3. 組 織

児童会の中に愛鳥クラブを設け、部員を中心に年間の計画をたて、それをもとに活動を進めている。4年生以上全員がクラブ部員となるが、全校児童が14名というこ

(巣箱をかける子供たち)



ともあつて、学校ぐるみで進めている。

4. 活動の経過

岩見沢諸鳥研究会(杉野雅加津所長)の指導によつて昭和33年頃から学校林に巣箱かけを始めたが、これが学校の行事となり、昭和39年には愛鳥クラブを設立し、年間計画をたて活動を具体化した。さいわい諸鳥研究会のような民間の研究者がおり、杉野所長のところへ行き、野鳥についての基礎学習や、野鳥観察の技術を習得した。

昭和40年には道林務部から愛鳥モデル校に指定され、活動はより活発になった。巣箱や給餌台の設置、また学校林に、野鳥誘致のための植樹を行なった。

昭和41年には、巣箱の大量架設と、観察用巣箱を設けて、巣作りから巣立ちまでの観察記録をまとめ、詩集「山の学校」として市内の小中学校に配布した。

昭和42年には、野鳥保護優良校として知事表彰を受け学校内の実践活動ばかりでなく、岩見沢農校の野鳥観察グループ、教育大の動物学研究会との交歓を進め、観察記録「むくどり」を発行し、市内の小中学校に配布した

昭和43年には、野鳥に対する餌づけの研究を進め、食餌植物の植栽や、コウライキジの放鳥を行なった。

昭和44年には、2名ずつが組となり、野鳥観察日誌の記入や、近くの愛鳥校との交流のほか、市の文化祭の理科標本展に参加した。

昭和45年に入つてからは、野鳥学習会を月に1~2度開催し、さらに野鳥の研究活動を進めている。

5. 活動による成果

野鳥ばかりでなく、他の動植物にもいたわりの気持をもつようになり、校舎に舞いこんだ野鳥やトンボを、そつと自然に帰す風習が身についてきた。また野鳥についての低学年の話題も「今日はこんな鳥を見た」と、興味をもつて話すようになった。

さらに、名前のかわからない野鳥を見たようなとき、特徴をつかんで、皆で正確に図鑑を調べ、科学する心が養われている。当校は児童数の少ない複式校であるが、こうした野鳥保護運動を通じて、児童にしっかりとした情緒の育つていることを見のがすことはできない。(全国野鳥保護実績発表大会の記録から)

野幌森林公園のカケス

江別市 井上元則



北海道に産するカケスはミヤマカケスといつて、本州のカケスのように頭上の地色が白くないばかりか、淡栗色で黒い軸斑がある点が異つている。体はブドウ色で、翼の雨覆羽には黒、藍、白の順になつた横縞が数条あつて美しく、道内で繁殖する留鳥である。

とぼけた顔に似合わず鳴き方が上手で、ギャー、ギャー、ジャー、ジャーの地鳴きのほかに、ニワトリやネコの真似もするが、時には人語を真似するあいきよう者である。古来アイヌにも親しまれ、バルケウチカツプカムイとよばれているが、バルケウはパロンクル（口達者、雄弁家）という意だと更科源蔵さんは解説している。

夏の終りごろ幼鳥が巣立つと、親鳥は数羽の幼鳥を連れて、森林公園のあちこちでギャー、ギャー、ジャー、ジャーと大きな鳴き声をたてながら、枝から枝へと谷間を飛び廻り、幼鳥に餌のとり方や食べ方を教えている。この鳥はいまから30年ほど前までは、野幌原始林にずいぶんたくさんいた。

林縁の農家のトウキビが実ると、家の周囲に干してあるトウキビに、この鳥が小群をなして、1日に何回となく飛来しては、ついばんだものである。ひところは、この鳥の害があると苦情のあつたこともあるが、昨今はめつきり減少してしまつて、こんな光景を与真におさめよ

うと思つても、短時間では容易でなくなつた。これは終戦後25年間禁猟区を解除していたせいであろう。

またこの鳥は食物を隠匿する習性があり、秋になるとナラの実やトウキビの粒を、食道にたくさん飲みこんでそれを他所に運んでいつて隠す。あるとき野幌林業試験場の官舎の庭に積んである薪に、この鳥が来て遊んでいつたあとを調べたところ、トウキビの粒を薪の節穴や樹皮の割目に1個ずつ押しこんであつた。

この鳥は野幌森林公園では、トドマツやトウヒの若い木の茂つたところで、六月ごろ繁殖しているが、メスが巢につくと春先盛んにギャー、ギャー、ジャー、ジャーと鳴いていたオスもメスもビタリと鳴き止み、オスは巢の周辺を遠くから警戒しているから、その巢を発見することは案外むずかしい。

食物は雑食性で、動植物ともに好み、特にナラの実、ヤマブドウの実、コクワの実などは好物であるが、地面を歩行する性質もあるので、オサムシ、ゴミムシ、コマツキムシ、ハサミムシ、バツタその他の昆虫やノズミなども食べることもあつて、有益な面もある。

ところで北海道のエゾマツ、トドマツの大森林を歩いてみると、ところどころで、1~2本の若いナラの木を見ることがある。附近には母樹となるナラがないのにもかかわらず、ナラの木が点々とあるということは、不思議にたえない。ナラの実はその重いドングリである。この実がタンポポやシラカバの種子のように風で飛んできて、生えたとはどうしても考えられない。これはこの鳥が秋になるとナラの実をついばみ、食道にいつばいつめて飛来し、針葉樹の枯木の皮の裏や節穴などに隠匿したのが、風で地上に落下し、そこからナラの実生苗が生えて、大きくなつたものであろう。

フィッシャー氏もいつているように、ブナの実のような重い種子は、自然状態では精々20米しか進むことができない。しかもブナは相当年をとらなければ結実しない木であるから、第2次の移動は60年後でなければ行われない。

したがつて、もしカケスのような鳥がおらないとしたら、ブナの木は1粒を移動するのに3千年もかかる勘定となる。またドイツのデンブラー博士がいつているように、動物による種子の散布は、われわれの想像以上である。なんと自然界の妙味には警嘆せざるをえない。(道栄養短大教授・農博)

砂崎灯台の渡り鳥

函館市 隅 田 重 義

- ◇……私の猟歴はすでに40年を越えたが、戦前は何不足なくこの沼へ行っても、……◇
- ◇……川を覗いても、湿地を歩いても、良いゲームを楽しみ、色とりどりの野鳥の……◇
- ◇……姿に接することができたものだ。……◇
- ◇……ところが戦後は、本道の山野もいたるところで開発が進められ、沼は変化し……◇
- ◇……湿地は開拓され、河川は切替えられて、自然の破壊が急速に進み、鳥獣の姿……◇
- ◇……もめつきり減ってしまった。私はその頃、思いがけなく、猟友と砂原村の砂……◇
- ◇……崎灯台に行き、「渡り鳥健在なり」と、心に明るい灯がともるのを感じた。……◇

■渡りのカモの大群

それは11月の中頃であつた。灯台の灯がとまり、静かに内浦湾が暮れてゆく頃、始めは海ガモの群れくらいに考えて、何気なく見ていた私たちは、次から次へと、10秒とは間隔をおかず、10羽、15羽、或いは30羽と、海岸線に沿って南下してゆく渡り鳥の大群を見た。

日没20分後ぐらいで、よく鳥の種類は判別できないがその大部分が陸ガモであることは間違いない。それは毎年のもので、その季節になると、荒れ狂う波と風の日も静かな星の宵も、時刻を合わせたように、砂崎灯台を経て、恵山灯台に向かうカモの大群を見ることができる。渡りの鳥は少なくなつたといわれながら、われわれの知らない時刻に、ひっそりと彼等は人目をしのぶように渡つていたのである。

それは何万羽というおびただしい数である。各猟場からの便りに、「どこにも鳥の姿はない」という狩猟者の嘆きが伝えられるが、私はひとり微笑し、心から満足している。それは猟果をこえた喜びである。

鳥の姿が少なくなつたのは、自然の破壊によつて、彼等に安住の地がなくなつたからであり、また加害者から身を回るための渡り鳥の智恵である。私の調査によればここ数年、決して渡り鳥の数は減つていない。ただ人目にふれにくくなつたのだと思う。

■渡り鳥の経路

本道には、いくつかの渡り鳥の経路があると思われるが、この砂崎は、極めて重要な場所と想像される。戦前戦後を通じて、この場所を通過する鳥の数に変化がないのは、それなりの理由によるものであろう。静かな、しかも海に突出して灯台があり、恵山灯台、大間灯台、尻屋灯台へと、南下の通路の目標になるのかもしれない。

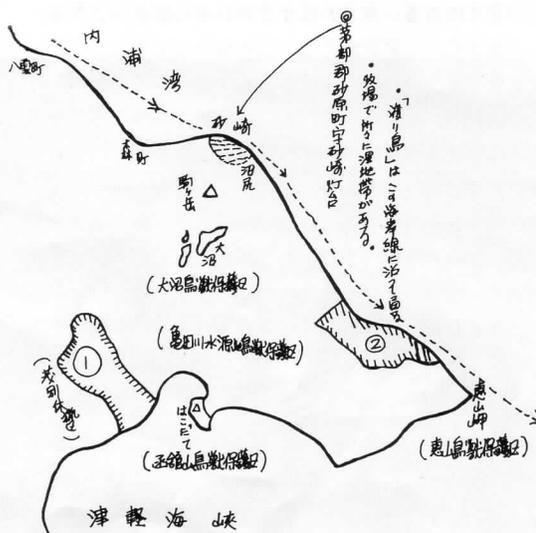
また、いつもカモ猟で感ずることだが、マガモなどは

1. 2度撃たれると、10日間位は同じ沼に帰つてこないことがある。また、非常に警戒心が強くなつて、一寸した物音にもすぐ飛び上るようになる。渡りのカモにしても、荒れ果てた自然には住むに場所なく、狩猟者に追いまくられて、やむなく通過してゆくのかもしい。

先日、東京の上野公園の池に、何万というカモの大群が入つているのを見て驚いた。ここでは撃たれないことを、カモは字が読めようはずがなくとも、本能的に悟つていようである。カモに限らず、すべての野鳥たちに安住の地を与えることができたならば、彼等はいつでも私たちの身の回りに帰つてくることを信じている。

狩猟者に希望したいことは、狩猟者こそ、よき自然の理解者であり、野鳥の友であつてほしいということである。したがつて、獲る前に保護を考えるならば、狩猟はいつまでも楽しいスポーツとなり得るであろう。

(鳥獣保護員)



■ 観察場所

大雪山にみなもとを発し、ゆう然として道央をつらぬき、石狩川はたゆみなく流れる。本道開拓の歴史をその川面に秘めて、大河の注ぐところ、砂丘に浜なすは咲きかおり、灯台の白さが秋の陽差しに映える。

つかれたように私は、秋から冬にかけて石狩の浜辺にシギの姿を求めた。石狩渡船場から約20分、砂丘にさえぎられた河口は、ゆつたりと川面が広がり、岸辺の湿地帯は、広々とした放牧地となつている。

自然の生物の姿は可憐であり、また美しいものである。しかし、異常な開発ブームと、河川の汚濁が、いつまで石狩河口の自然をいたわってくれるのだろうか。秋の日々はわびしい。

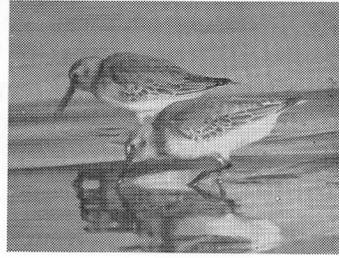
9月6日 快晴 気温が高く暑い。9時30分から16時。

今日は干潟が大きく出ている。私よりひと足先に双眼鏡をのぞいている人を発見したが、会員仲間の北大の松岡さん。その熱心さに感心する。私が近づくと、今日は何々がありますよと教えてくれる。水の中で餌をあさっているのはくちばしと足の長いアオアシシギ。シギの中でも一段とスマートに見えた。干潟には小型のトウネン・メダイチドリが一斉に並んで泥を突つている。そのほか、オオソリハシシギ、オグロシギを見る。いつまでも見あきのしない光景である。

9月13日 快晴 気温高し。9時30分～16時。

オグロシギ11、オオソリハシシギ2、チュウシヤクシギ1、トウネン10、メダイチドリ5、ハマシギ2、オバシギ5羽を見る。

今日は水が満ちていたので、放牧場の柵を一回りして河口近くに出る。水ぎわにオグロシギの群を発見する。



数えると11羽で、名のとおり尾が黒い。それが一団となつて飛び立つときは実に美しい。

今日も北大の松岡さんのほか、応用動物学教室の阿部助教などにも合う。干潮を待っていると、大きなシギが舞い降りる。乾いた砂地の草の中に立つ。チュウシヤクシギである。ハリモモチユウシヤクじやないかということで図鑑をよく見たが、やはり普通のチュウシヤクだつた。

そのうち潮が引いて、干潟にメダイチドリ、ハマシギ、オバシギなどが、次々と現れる。その中には夏羽の残っているものもあつた。双眼鏡なしでもよく確かめることができた。

9月20日 快晴 残暑あり。11時～15時。

ホウロクシギ1、ダイゼン5

干潟が大きく出ていた。今日は愛護会の野村幹事夫妻も一諸である。ホウロクシギの水浴びをよく観察できたダイゼンの一群が哀調を帯びた叫びをあげながら飛来する。真近かに見ると姿も美しく、声が印象的であつた。

9月23日 晴 干潟なし。

シギ、チドリが頭上をしきりに飛ぶが、今日は干潟がないせいか降りないアオサギの20羽ほどの大群に気持がほころぶ。今日は同じ幹事の百武さんに逢う。いずれおとらずの野鳥愛好者である。他人は私たちのことをなんといいようだろう。鳥キチというかもしれない。

9月27日 快晴 無風、暑気強し

9時30分～16時。

ダイゼン6、オオソリハシシギ1、ハマシギ3、ヘラシギ1羽を見る。ハマシギのうち2羽は夏羽である。

干潟の具合がよいのか、足もとまでハマシギが近づてくる。よく見るとそのうち1羽が少し小さい。くちばしが少し変つて平たい。いつか写真で見たヘラシギである。図鑑を開いても間違いない。新しい鳥を発見したときの喜びは筆舌につくしがたい。

写真をとりまくつたが、興奮していたせいか、出来はあまりよくなかつた。こんな日は帰路の足どりも軽い。

10月4日 快晴 無風、10時30分～14時。

今日は干潟が大きく出ている。

ツルシギ2 アオアシシギ8、ホウロクシギ1、ハマシギ20(夏羽2)、ダイゼン6、メダイチドリ3(夏羽2)、トウネン4。

10月1日から狩猟解禁となり、以前のように悠然とした落ち着きがないしぐさに見えた。気のせいか人影にもすぐ飛び立つ。

水の中に入っているスマートなシギ。ツルシギであるハマシギの中に、片足のないシギがいる。どうしたものだろう。それでも1人前に片足でピョンピョンはね歩きをしている。いたましい気がする。シギの警戒心が強くなり、写真を思うように写せない。

10月10日 快晴、10時30分～13時まで。

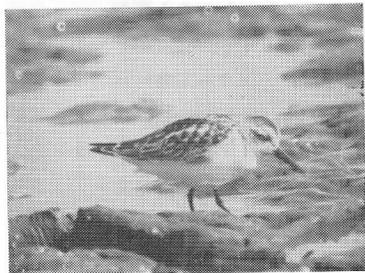
アオアシシギ1、ツルシギ2、ハマシギ30、ダイゼン3羽を見る。ツルシギは先日のものだろうか？なつかしい感じである。シギの警戒心は益々強くなっているようだ。ハマシギの大群が水辺で群をなしているのを始めてみた。壮観である。

11月1日 くもり時々晴 11時30分～13時30分。

雪がちらつく。すでに冬の気配である。

ツルシギ1、ハマシギ6。

もう石狩のシギともお別れと思つて来たが、その姿を発見し愛着がつくる。最初は姿を見せなかつたが、草むらを歩いていると、寒気をつんざくように勢いよく飛び立つ。そのうちの1羽は、足の紅いツルシギであつた。ツルシギに見とれていると、私の足もとまで小さなシギが近づてくる。ハマシギであつた。私の姿を見ると、あわてて後むきになり、それでも飛び立つことはなく餌をついばんでいる。すごくとぼけたかつこうである。



11月3日 快晴
12時～16時。

小春日和とも
いうべき暖い日
である。干潟が
広い。アオアシ
シギ3、ハマシ
ギ100、ウミネ



コ300。

アオアシシギのスマートな足が、干潟の泥にくつきりと足あとを残しており、近づいても逃げない。夢中になつて餌を探している。渡りの準備であろう。

これら海浜地帯のシギ、チドリの類は、主として本道には旅鳥として飛来しているものであろう。渡りの最盛期と思われる9月頃が、その種類においても、数においても多いようだ。

この鳥の特徴は、海湾の干潟や、浅瀬、三角州、海岸に近い湿地、草原などに入り、細く長い足と、くちばしを使つて、泥の中や、砂の中から、甲殻類や、小エビ、小ガニ、腹足類などを食べている。

海が荒れているせいか、今まで見たこともないウミネコの大群が、中州に折重なるように羽を休めている。

牧柵から離れて、いつも釣人がたむろしているあたりの砂丘に近いところに、100羽以上と思われるハマシギの大群を見る。なかに小型のものが混つており、サルハマシギかもしれないと思つた。

立っていると、私の足もと2・3mのところまで近づてくる。手をさしのべたいような可愛らしさである。10月の狩猟解禁の頃からみると、すっかりと落ち着きをとりにどしたようだ。

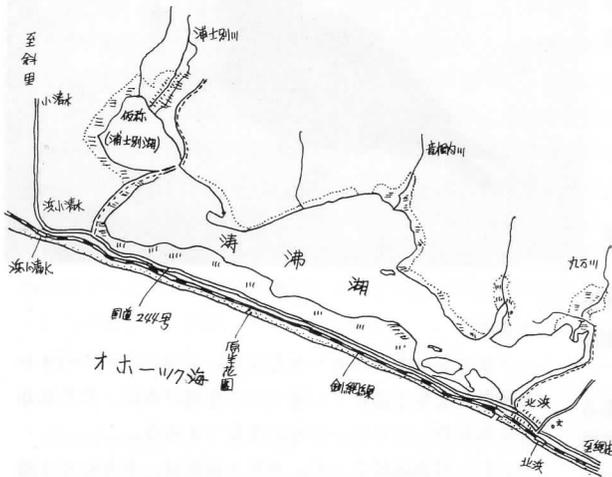
なかに1本足のがいる。いつか私の見た1本足のものであろうか。やがて干潟の方へ移動する。私もそれにつられるように歩む。泥あびしているのもいる。やがて彼等は、遠い南の国へ渡つてゆくのだ。そして、また明年の春には帰つてくる。心の友であるシギたちよ、みんな元気で帰つておくれ。心にいいようもない寂しさがつる。

(本会幹事)

写真 6頁上・ハマシギ、下・オグロシギ、
7頁上・チュウシヤクシギ、下・ヘラシギ

濤沸湖に残留した白鳥

網走市 玉田 誠



とは別に 原生花園の北浜よりに6羽の白鳥を視認、翌10日17時30分頃湖岸におもむいて成鳥1、変羽完了間近の幼鳥1、半ば変羽した幼鳥4であることを確認した。更に湖岸づたいに東行し、唯1羽水面に浮いている件の白鳥も確認した。

この6羽(5月19日朝発見した彼の2羽も含んでか?)は12日朝以後視認できず、又1羽だけ別になつていた白鳥も視認できなかったため、シベリアへ同行したもとは考えたが、今迄にも数日間姿を見ぬことがあつたので、念のため眼鏡観察は欠かさなかつた。

そして6月16日朝、また浜小清水側の湖面に白鳥1羽を視認したときは、喜びとも悲しみともつかぬ複雑な気持であつた。そして、これはもう帰郷せず、濤沸湖で夏を越すものと断じ、ひたすら無事に夏を越すようにと念じつつ、観察を続けた。

風

連湖などには、例年餌不足から体力の回復がおくれた白鳥が何羽か残るようであるが、濤沸湖ではこのような現象はかつてみられなかつた。しかし今年は1羽の白鳥が濤沸湖に残留し、夏を越したのを目撃することができた。

濤沸湖における白鳥の確認数は5月7日-32羽、8日-29、9日-21、10日-10羽、そして11日の朝は0となるはずであつたが、1羽だけ残留していたのである。そして12日から19日にかけては、浜小清水側の岸辺の殆んど同一場所にその姿をた見の、或は飛ぶことも歩くこともできない状態にあるのではないか、また保護の必要も懸念されたので、19日の朝は思いきつて接近してみたあと14・5mという所まで近寄つたとき、水面上を約30mほど移動したのち対岸に飛び去つた。この時の飛翔距離は約1600m。羽根の打数は毎分換算約160で、通常の湖面移動の場合と変らなかつたし、すでに5月も下旬に近く、餌も充分にあるので安心して引揚げた。又着水した辺りには別の白鳥が2羽いることも確認できた。

5月下旬のほとんどの日は、岸近くの草原にその姿を見ることができたが、他の2羽は視認できなかった。またこの頃同車していた人が「白鳥は卵を生む頃になると水から上がつて草原で暮す」と、話しているのを耳にした。

6

月に入ってからはその姿を岸近くの水面上に見るのがほとんどであつた。またかなり注意はしたが、19日の朝確認した対岸の2羽を視認することはできなかった。6月9日の朝、この白鳥

7

8月の2ヶ月の大部分の日は、5・6月とは対比的に、対岸の区域にその姿を視認した。そしてこちら側には対岸にいた青さが居付いたのが面白かつた。8月の上中旬は夏休み中で諸種の都合でほとんど観察せずにおわつた。

9月にはいつてからは、原生花園の北浜寄りの岸辺でその姿に接した。朝夕はめつつきり冷えこむようになつたが、1羽寂しく、とにかく無事濤沸湖で夏を過したこの白鳥も、親兄弟や仲間と再会できる日も間近である。

追記

9月30日以後は、原生花園の対岸に移り住んでいる。10月1日からは1羽増え、今度は春と異なり仲良く2羽共存している。親であろうか、兄弟であろうか。又5日16時50分頃これ等の白鳥とは別に、近くに成鳥3羽を確認した。対岸に増えた1羽と共に来たものかどうか。いつしよにならない所を見ると別なのであろう。

例年より10日、昨年より10日早い初飛来で、計5羽が在湖していることになる。(10月8日記)

写真を撮る機会がないではなかつたが、敢えて近づき驚かすこともないと思い9月11日朝泳いでいる所を記念に1枚だけ写した。400m/m望遠に2倍のテレプラスを用いたが手持ちのためお粗末な出来におわつた。(網走市立北浜中学校)

身近かな小鳥

土屋 文男

私たちに一番身近かな鳥といえば、何といつてもスズメしかし、よく考えてみますと、生態や、学術的な面でまだよく知られていない小鳥のグループに入るような気がしません。

とかく人間は、珍しいものには異常な興味を示しますが、ありふれたものには労力を注ぎこむことをバカらしいと考えるのでしょうか。

話は変わりますが、私の専門の医学の分野でも、ありふれた病気である「カゼ」の研究など、ぜんぜん進んでいません。インフルエンザやポリオ（小児マヒ）は、カゼの親戚の病気で、これからのものはよく研究されたのですが、誰でもかかるカゼの研究はさっぱり進んでいない現状です。とにかく、物珍らしくないからでしょう。

スズメと人類とのおつき合いは古く、スズメを見たことのない人は皆無といつたくらいですが、まだまだ分かっていないことの多い小鳥です。

分類の面でも、最近までスズメ科という中に、スズメやイカル、シメなどの野鳥、さらには、外国から渡来したカナリヤまで入っていたのです。しかし、どうも変だとい



(上) 巣箱を降して体重を測る。足にはカナリヤ用のアルミの足輪をはめてある。
(下) スズメの巣とヒナ。巣箱はコムケドリ用の高さを半分にしたものを自製した。ヒナはまだ裸である。

ことで日本鳥学会の分類では、スズメやニユウナイスズメはキンバラ科になり、あとの鳥たちはアトリ科ということになりました。最近まで生態の面や、解剖学的な面で論議のあつた証拠です。

さて、図鑑を見るとスズメの分類は、まちまち。動物の分類などは学者によつても意見が違い、あながち統一する

必要性はないかも知れませんが、中学生や小学生が市販の図鑑を見たときには、少々迷うのが実状です。

スズメの科名は PASSERIDAE、前述のようにキンバラ科というのは、外国産の鳥だからふさわしくないで、日本産のスズメはスズメ科とするのだという学者もあります。日本鳥学会の分類や市販の図鑑の多くはキンバラ科となっており、清棲幸保博士の著書や図鑑はスズメ科となっておりません。一度書店などで見ていただきたいものです。

また、昔の分類のまま、カナリヤとスズメを同科の鳥として扱っているものなどあつて千差万別。一番ありふれた身近かな鳥であるスズメは、もつともつと観察してやらなければならないものと考えています。

(日本鳥学会々員・医学博士)

石狩河口探鳥 (九月十五日)

札幌市 森

功

河口ひろしホウロクシギと教えらる
アオサギの翔つ流木に秋白し
セキレイとヒバリともつれ葦の空
タカブシギ翔ち湿原の昼閑か
相寄りつ岸近く四つオグロシギ
カラスらは岸にシギらは波の上に
アオアシシギ翔ちけり声の涼しさに

(協栄生命寮)

道東の野鳥保護に50年

岡さんに勲六等瑞宝章

11月3日の文化の日、根室市の岡清松さんが、本道では初の野鳥保護功労者として叙勲された。岡さんは本年70才、本会の会員であり、また根室地域の鳥獣保護員として活躍している。また、鳥獣保護功労者としての叙勲は全国でも3人目である。

●野鳥の好きな洋服屋さん

岡さんの本職は洋服屋さんである。新潟県長岡市に生まれた岡さんは、洋服の技術を習うため東京に出て、ミツエル洋服専門学校に学び、根室市に居住したのは大正11年である。当時の道東地方は全く未開発地域で、野生鳥獣の豊庫であつた。その大自然に心をひかれた岡さんは、ひまを見ては野鳥に親しんだのである。

とくに風蓮湖のオオハクチョウには、神秘的な魅力を感じ、仲間とともに、冬の湖畔に傷ついた白鳥の手当をしたり、えさを与えてきたものである。また、「根室風蓮湖白鳥保護協会」の設立に尽力し、全国にさきがけて、早くから白鳥保護のための組織的な運動にまで発展させた。

また、岡さんの功績としては、ユルリ、モユルリ島がたぐいまれな海鳥の繁殖地であることに着目し、道庁や文部省にも足をのぼし、両島の天然記念物指定に成功している。この島には、北方系の海鳥として、エトピリカ、チシマウガラス、ウミガラスなどが繁殖している。

さらに、根室地方に飛来するタンチョウの姿を発見した岡さんは、この保護に全力をあげ、足まめに調査をして営巣地を確認し、この地域を鳥獣保護区にするために努力し、同地方の「タンチョウ保護委員会」を結成させた。

●野鳥保護思想を普及

岡さんはまた、みずから8ミリ撮影機を購入し、オオハクチョウ、タンチョウなどの数々の記録映画を作成、これを小・中学校に巡回し、児童、生徒の野鳥保護思想の普及に役立っている。

さらに、過去10数年にわたって、オオハクチョウの飛来状況調査を仲間とともに実施しているが、この種運動

を民間人として実施している例は、全国でも数少ない行為といわれている。

また根室地方に新しい野鳥を繁殖させるため、コウライキジを移入し、みずからこれを繁殖させ数多くのコウライキジを放鳥している。この叙勲にあたって岡さんは「鳥の好きな私のこの叙勲は、私の仲間全体に与えられたもので、このことが、野鳥保護思想の普及につながれば、これ以上の喜びはない」と語っている。

また、岡さんは、野鳥保護功労者として昭和39年には知事表彰、40年には農林大臣賞を受けている。



白鳥殺して 6年の刑 (ソ連)

この5月、ソビエトのウワフの自然公園に住みついていた白鳥を、殺して食べてしまったグレン隊が、こ

のほど強制収容6年の実刑に処せられた。この二人は、エフドギモフと、エーゴシンで、前科二犯のしたたか者であつた。

ウワフの自然公園に住みついた数羽の白鳥は、付近の人々のマスコットとして愛され、夕方までこの白鳥を見る人が絶えなかつた。この白鳥をねらつたのが刑期2年を終えたばかりのエフドギモフで、これもグレン隊仲間のエーゴシンをさそつて白鳥を襲つたものである。エフドギモフは、白鳥の寝ているところを首をわしづかみにしてひねつたもので、この肉で二人はウオツカをかたむけていたという。

いづこの国にも残酷な密猟者があるが、保護鳥を捕つてわずか数千円の罰金で済む日本と違って、自然物を大切にすソ連の国情が現われている。

(写真は野鳥観察をする岡さん)

(エサ場に来たヒガラ
小樽市 渡辺 俊 夫 さん)



心ないハンターに怒り

厚真町 梅木 賢 俊

5月に厚真町に赴任して約半年。春から秋にかけての四季の移り変りに、野鳥はこよない私の心の友である。ときには道野鳥愛護会の探鳥会に参加したり、朝早くから付近の森にプロミナをかついで出かける。

とくにム川の河原はシギ類の渡りが非常に多く、日曜日が楽しみである。ときには大型のアオサギがゆつたりと舞い降りたり、タカ類にもお目にかかる機会が多い。

ところが、10月の狩猟解禁とともに、おし寄せるハンターにはどきまぎする。獲物のあるなしにかかわらず、銃声だけは激しくこだまする。

10月のある日、ム川の河口近くで私はシギの観察を行っていたが、ハマシギの姿を発見し、眼鏡の焦点を合わせていると、横合いからバシンという激しい音で、ハマシギは消し飛んでしまった。ふりかえると、すぐ近くの茂みから銃をかかえたハンターが4人。

「どうだ、一発で仕止めたぞ！」

といかにもほこらし気である。

「その鳥は狩猟鳥ではないんですよ」

と、私は怒りにもえて叫んでしまった。一瞬ぎくりとした狩猟者も、私が警察官や、取締関係者でないとするや、ニヤニヤして、

「シギは撃つてもいいんだ」

と動じない。やむなく私は、近くに止めてあつた乗用車のナンバーをひかえて、これを報告することにしたがこうした悪質ハンターの行動が、一般狩猟者の品位を傷つけていると思う。私は決してスポーツとしての狩猟を否定する気はないが、定められたルールにしたがっての

狩猟は認めるが、単に猟銃を撃ちまくり、獲物の多寡を問題視するような狩猟には反対である。

また、故意なのか、無知なのかかわからないが、シギであれば、どれも狩猟鳥として射撃するなどは言語道断である。数十種のシギ類の中で、狩猟で定められているシギは、ヤマシギ、タシギ、ジシギの3種だけである。

最近狩猟に対する批判が厳しくなっているが、ハンターみずから墓穴を掘っているのではないかと思う。

風蓮湖の狩猟禁止を

風蓮湖愛鳥保護協力会
走古丹部落会一同

道立自然公園として年々観光客の増している風蓮湖において、今年も10月1日の狩猟解禁とともに、数多いハンターの撃ち鳴らす銃声に、恐怖を感じながら過ぎなければならぬと思うと、心ない狩猟者に怒りを感じるものである。

同じ風蓮湖でも、根室市の区域の方は、すでに鳥獣保護区に指定されているにもかかわらず、別海村側においては指定されないのはどうしてだろうか。

最近、我々の部落に近い湿地帯には、数羽のタンチョウが飛来し、人家のそば近くにたわむれる姿を見るとき限られた人だけの娯楽のために、自然を破壊し、こうした保護鳥まで恐怖におびやかすことは、北海道の自然美を維持するためにも問題がある。

やがてシベリアからはオオハクチョウが飛来しようとしている。この白鳥たちの長い旅の労を休める風蓮湖であり、休息しようとして飛来する白鳥にとつても、連日の銃声を聞くとき、休息はおろか、生命の危険を感じ、着水することができず、再び休息の場を求めて飛んでゆくさまを、現地の者であれば、誰でも認めているところである。

なお、その他アオサギ、シギ類、ガンなど、数多い野鳥が年々減少してゆく様をみると、我々にとって身をきられる思いである。

風蓮湖全体を狩猟禁止区域とすることについては、早くから観光協会等を通じて行政機関に強く要望してきたが、いまだなんらの対策もなされていない。このため、今回地元民により、風蓮湖愛鳥保護協力会を組織し、風蓮湖の野鳥保護運動を進めることにしたものである。

・本会の会員を募ります・

北海道野鳥愛護会は、自然を愛し、野鳥保護に理解を有する人々の会で、どなたでも加入できます。野鳥の好きな方、野鳥を研究したい方、野鳥を通じて友を求めたい方はどしどし加入して下さい。

1. 会員の資格は、年齢、性別を問いません。
2. 会費は 年額 1人300円。団体は1000円で。加入希望者は会費を添え、住所、氏名、職業を明記のうえ申し込んで下さい。
3. 加入申込みは、道庁林務部林政課内「北海道野鳥愛護会連絡事務局」に提出して下さい。会員には

会報（本号形式のもの）を年4回、その他野鳥通信を配布し、会員の親睦と研究活動を進めるほか探鳥会、野鳥研究会、野鳥懇談会等に参加していただきます。

☆ 原稿募集 ☆

野鳥だりに皆さんの原稿を寄せて下さい。皆さんの身近かで発見した野鳥の記録や、感想文や愛護会に対する意見でも結構です。とくに写真を歓迎します。次回の発行は昭和46年2月ですから、1月20日頃までに提出願います。道庁林政課猟政係内「北海道野鳥愛護会連絡事務局」あてに。

< 行事日誌 >

- ◇ 8月29日午後1時から、林業会館会議室において役員ならびに幹事の合同会議を開催し、犬飼会長のほか宮脇、井上、土屋の各副会長も出席しました。今後の行事計画等について協議しましたが、野鳥だよりの発行については、できるだけ研究論文を集録してほしいとの要望がありました。また年内に会員名簿を発行すること、9月、10月の定例探鳥会の日程等を決定しました。さらに、今後は札幌以外の地方でも、野鳥教室（野鳥集会）を開き、野鳥保護思想の普及と、会員増加の運動を進めることにしました。
- ◇ 第4回探鳥会は、9月15日、石狩川河口でシギ類を中心に実施しました。当日は快晴にめぐまれ、8時10分借上バスを利用し、道庁前を出発し、約40分で現地に到着しました。石狩川もヘドロで汚染されていましたが、大きなホウロクシギが、真近にえさをついばんでいる姿に、みんな感動の声をあげていました。当日は、オグロ、チュウシヤク、タカブ、アオアシ、ムナグロ、メダイチドリなど観察できました。アオサギも3羽ばかり入っていました。
- ◇ 10月18日、第5回探鳥会は、場所を野幌森林公園に移しました。当日はあいにく雨で、参加者は少なかつたのですが、秋の渡りの時期で、鳥の数も多く、冬の気配が立ちこめる林内で、最後の探鳥会を楽しみました。当日観察した野鳥は次のとおりです。
モズ、アオジ、コガラ、ノスリ、イカル、カシラダカ、ベニマシコ、ホオジロ、ツグミ、ゴジュウカラ、キクイタダキ、ヒヨドリ、アカゲラ、アカハラ、ク

ロジ、マミチャジナイ、コゲラ、キジバト、ムクドリ、ハシボソガラス、スズメ、以上。

< 事務局だより >

- ◎ 全国的に狩猟による事故が多発し、これが閣議の問題になり、林野庁においても、狩猟と鳥獣保護の問題について、さらに検討を進めているようです。鳥獣保護の行政施策が、さらに強化されることを望むものです。
- ◎ 日本野鳥の会が、カスミ網の規制を旗印し、中部地方の山中で、密猟の摘発を行なつて、その大がかりな違反の全容を明らかにしていますが、本道でも、一部の地方では、まだカスミ網が密猟のために使用されているようです。みんなで監視の目を育てて、密猟防止に努力したいものです。
- ◎ これから冬に入りますと、野外での野鳥観察は困難になります。是非「給餌台」をかかげてほしいものです。庭に冬の野鳥を呼び寄せ楽しむことができます。なお、藤の沢の小沢広紀さんの家では、以前から冬の給餌を行なっており、居ながらにして数多くの野鳥を窓越しに眺められます。但し「白鳥園」というジンギスカン鍋屋を経営しておりますので、イツコンかたむけながらということになります。
- ◎ 本年は発会早々で、十分な仕事ができませんでした。昭和46年度には、積極的な行事を計画して参りたいと考えます。なんといたつても、会員各位の意志の発表がありませんと、会の運営についてとまどいがちになります。どんな小さなことでも結構ですから、どしどし進言願います。向寒の折から皆様の健康を祈ります。